

牧口常三郎著 『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』

（『新教』第5巻第12号別冊、創価教育学会）

解題

牧口常三郎は、1933年2月4日に長野県で起きた左翼教員検挙事件および、それ以降に起こった教員赤化事件の転向者らに対して「完全転向」指導を試みている。その内容を示す資料が『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』というパンフレットである。この資料の元になったのは、戸田城外が編集兼発行人として日本小学館から発行した教育雑誌『新教』第5巻第12号（1935年12月刊）に掲載された文章で、翌年初頭辺りに別冊のパンフレットとして配布されたようである。

『新教』第6巻第1号（1936年1月刊）には「告『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』と題する昨十年十一月号の論文を、別刷として広く頒つことにした。御心当りへ配布されんとする篤志の方には、残部のある限り贈呈いたす。御申込下さい」（55頁）とあるが、同第5巻第11号（1935年11月刊）を確認すると同論文は掲載されておらず、パンフレットの表紙には「『新教』第五巻第十二号別冊」と明記されているので、第11号に掲載されたという記述は誤りで、第12号に掲載された後、別冊として配布されたと考えられる。

『新教』には、主に教員が授業で使用する副教材となるような記事が収録され、ほかには授業案、論説などが掲載されている。他の教育雑誌と異なるのは、牧口常三郎の提唱する創価教育学に基づいた論説が中心になっており、それを普及させる役割を担っていたことであろう。『新教』の第5巻第11号の巻頭言から「宗教革命」という文言が登場して以降は、宗教に関する論説も目につくようになる。『新教』第6巻第1号～第6号（1936年1月～6月刊）までの表紙には「教育革命」と「宗教革命」が大きく掲げられている。第6巻第7号（1936年7月刊）は『教育改造』と改題された。1936年4月頃には創価教育学会の活動方針として「教育革命」と共に「宗教革命」が掲げられるようになった。戸田城外が発行した教育雑誌および現在までに発見された『新教』及び『新教』の前身である、『新進教材 環境』、『進展環境 新教材集録』、『新教材集録』、後継誌である『教育改造』については、『評伝牧口常三郎』（「創価教育の源流」編纂委員会編、第三文明社、2017年、313・354～359頁参照）、『評伝戸田城聖・上』（「創価教育の源流」編纂委員会編、第三文明社、2019年、297～299頁参照）に詳しくまとめられているのでそちらを確認していただきたい。

今回、資料紹介するのは、『新教』第5巻第12号に掲載された文章をもとに別冊のパンフレットとして構成された『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』である。資料紹介として復

元するにあたって、池田大作記念創価教育研究所に所蔵されているマイクロフィルム版複写物を原典とした。表紙には、右側に発行媒体を示す「『新教』第五卷第十二号別冊」、真ん中にタイトル「赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか」、左側に発行元を示す「創価教育学会」が記されている。また押収された資料であることを示す「押証第二四号」「東京地検 昭和18年 押第七五六号 内ノ24号」の貼りが付されている。

内容は、〈巻頭言〉の「教育改造と宗教革命」、〈本文〉の「赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか」、〈奥付〉の「主張」で構成されている。本資料紹介ではパンフレットとしての一体性を尊重し、〈巻頭言〉と〈奥付〉も収録している。「教育改造と宗教革命」は『新教』第5卷第11号の「巻頭言」である「教育改造と宗教革命」と同じ文章が再録。同号で「巻頭言」と表記されている箇所はパンフレットでは「青年教育者の使命」に変更されている。この〈巻頭言〉は、『牧口常三郎全集』第9巻（第三文明社、1988年）に収録されており、同書の解題では『新教』第5卷第12号別冊が出典とされているが、後に同第5卷第11号が発見され、同号の「巻頭言」として掲載されていることが判明した。執筆者は牧口常三郎。〈奥付〉の「主張」は、『新教』第6卷第1号～第6号までの巻頭頁（同第6卷第2号には無い）に掲載された本誌の「使命」「主張」として掲げられたものと趣旨の文章である。執筆者は不明、おそらく編集部の手によるものと考えられる。

詳しい内容の説明および解釈上の注意については、本号掲載の拙稿「治安維持法下における思想犯転向輔導施策への牧口常三郎の対応に関する研究—牧口常三郎の『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』を読み解く—」を参照いただきたい。

（岩木勇作 記）

凡例

- 一、『赤化青年の完全転向は如何にして可能なるか』を資料紹介として復元するにあたって創価大学池田大作記念創価教育研究所蔵のマイクロフィルム版複写物を原典とした。
- 一、〈本文〉および〈巻頭言〉・〈奥付〉の字体は、新字、旧仮名遣いで統一している。
- 一、原文は基本的に縦書きだが横書きに改めている。横書きは左書きで統一した。例外として図表は縦書きのママである。
- 一、原文の図表に枠線はないが、見やすさを考慮して枠線を入れている。
- 一、見出し及びタイトルはすべて太字で表記した。
- 一、誤字等については（ママ）とし、（ ）内で正しい語句を示した。
- 一、おどり字のくの字点は「ヽヽ」「ヾヽ」または「ヽヽヽ」に改めた。
- 一、原典にある修正等の書き込みについてはこれを反映しない。

〈巻頭言〉

青 年 教 育 者 の 使 命

教育改造と宗教革命

国民生活の全般的改善の国策を建てるが為には、財政経済等のそれ等は、固より緊急には相違ないことではあるが、もう少し根本的に大観するならば、教育改造の国策から確立しなければ、枝葉末節の姑息策にしか過ぎないとは、吾々が屢々論議した所である。而して、その教育改造を企図するに当り、多年注入教育の伝統に毒せられた教育の制度並に内容を改めんが為にはその根本中核をなすべき宗教革命にまで及ばない限りは、永久に画竜点睛を欠くの失を脱し得ぬであらう。

然らばその宗教革命は如何にするか。現代の科学とは背反するものとして、マルキスト並にすべての科学者達から擯斥を受け、阿片の如く信を失墜してゐる既成宗教を、思ひ切つて抛棄しなければならぬ。然して後、更に科学的文化生活に合致して一害なく、且つ完全に国体に契合すべき真実の宗教を選定しなければならぬ。

かゝる根本中核の充実せざる教育が、如何に普及したればとて、畢竟、空洞の喬木か、究極目的の定まらぬ航海の如きものに過ぎまい。この事は嘗ては仏国と同様に、宗教を敬遠したことを誇りとして来た我が国の教育が、精神教育の結果に於て甚だ貧弱であるのに鑑み、近來漸く宗教教育を思ひ出し、俄にその調査機関までも設けるに至つたことが証明する所であらう。

嘗ては犬猿の關係の如く遠ざかつてゐた教育と宗教とが、斯くまでに接近しなければならぬことの必要が感ぜられるに至つた以上は、勢ひ宗教革命にまで進展するのは避け難き帰結といはねばなるまい。何となれば在來の既成宗教はいやだが、教育内容の根本中心として宗教要素がなくてはならぬ。『河豚は食ひたし命は惜し』何とか名案は無いものかと思案投げ首の体たらくなることが、知識階級の偽らざる総念であらうからである。

こゝまで来ると、最早問題は簡単となる。所謂宗教革命の大問題が、さやうにたやすく出来るか否かといふことである。これに対して吾々は『出来る』と断言するだけの確信を持つものである。勿論近來の生活難の非常時に乗じて雨後の筍のやうに続出するインチキ宗教の如きを意味しはせぬ。もしも純真に真理を追求し、正善を願ふて怨嫉せず、歪曲の根性を反省して、道理に従ふに臆病ならざるものであるならば、知ると共に信ぜざるを得ざる底の宗教が容易に求め得られるのである。而してそれが得られたならば、他のすべての分業生活に於けると等しく、初めて教育の根柢が確立される筈のものである。

さりながら、斯やうなる大生活改革は、所詮、純真にして真理を求め、正義の爲め、国家のためには、敢然として闘ふだけの気概ある青年教育家にあらざれば、てんで相手にされぬものであらう。かのそんな宗教があるものかと嘲笑するか、若しくは有つて困ると怨嫉するかして、殊更に耳を塞ぐ階級の如きは共に語るに足らぬ。是等は宗教問題に限り、『知らしむべからず依らしむべし』といふ無智識階級と同様に、しかも始末の悪い部類に属することは、少し試して見れば直に肯かれる所であるからである。しかしながら、たとへ少数でも、新鋭なる率先者が実生

活に証明した以上、必ず依らざるを得ざるに至らう。

偶々文部大臣の諮問機関たる宗教教育協議会の委員会に文相になした答申案が発表されたが、右の理想から見れば誠にくだらないものである。失礼ながら宗教の本質を知らない教育家と、教育の本質を知らない宗教家と、そして偏狭なる各分派に囚はれ、公正に自他の比較検討が出来ず、詐り親む人々の寄り合ひなるが故であらう。一国教育の首脳者がこんなものを参考しなければならぬかと思へば情ない極である。不服とあらばいくらでも議論する。希くばもつと真剣に研究せられよ。国家教育のため、真に求むるなら道は近きにある。

〈本文〉

赤 化 青 年 の 完 全 転 向 は 如 何 に し て 可 能 な る か

全国数万の赤化青年転向指導のために

創価教育学研究所長 牧 口 常 三 郎

序 説

赤化事件に関係した禍によつて郷里の教育家からいつまでも疑ひの目を以て見られ、悲惨な生活を送つて居る在京者の四君が不思議な因縁によつて本会の正会員となり、半歳余り創価教育学の科学的研究から、遂に宗教革命にまで徹底した結果、茲に完全なる転向が出来、明朗勇敢なる生活に復帰したことを赤裸々に郷党に報告して謝罪すると共に同境遇に苦悩しつゝある百余名に光明を与へんとする目的を以て、それらの四名と共に余は某県に旅行して左の如き講演をして帰京した。これは全国の数万人を超えたる同境遇の青年に対して共通の事として、教育家諸君の一顧を煩はすに足るべしと信ずる。

吾々は先づ内務省警保局、警視庁労働課長等を数回訪問、関係教育家等と懇談して少からず感動を与へ、内務省より郷里の警察部へ特別電話までかけて貰つたこととて、万事に都合よく完全に予定の目的を達したものである。

- 一、完全転向を保証する原理はあるか。
- 二、完全転向とは何を意味するか。
- 三、その証明は何を以てするか。
- 四、その基礎たる宗教とは何ぞや。
- 五、宗教革命は可能なるか、その方法。
- 六、国体と一致したる宗教とは如何。
- 七、創価教育学との関係如何。

一、完全転向を保証する原理はあるか

現在の赤化青年のすべてを完全に転向せしめ得るだけの指導原理はあるか。もしあるとせば、本人は勿論、社会のためにも、はた日本全国に於て知識階級の最も注目すべき緊急事項ではないか。だが、「今の世にそんな事が出来るものか」と、真面目に考へようとししないのが普通のやうである。これは今日まで転向者は多くても、大概是止むを得ざる境遇や事情からであつて心の奥底から目醒めたのではないと思はれるから無理はない。といつて、我が国の数千余名の青年教育者がこの儘朽ち行くのを袖手傍観することも出来ないとしてか、一人前百余円も出して赤色脱退の講習などに派遣するのを見れば、内実は注意されるに相違ないと信ずる。そこでもしも、實際上に完全転向の証明がされ、その基づく原理が説明されるならば最早疑ふ余地がないではないか。之が吾々の当地へ参つた重要な理由である。たゞしこれは局外者としての立場から言ふことで、事件の当事者としては、その前に「皆さんに大なる心配をかけて、済まなかつた。就ては不幸中の幸に完全なる転向が出来たつもり故、証拠となつて、他の友達をも導びきたい」といふ謝罪の意味である事は申すまでもないのである。

これだけを表明したならば、もう、いつまでも過去の怨みを持たれる方はあるまい。悪かつたには相違ないが、その悪を未然に反省せしめるだけの先輩も無かつたといふことには、責めるものにも反省の余地があらうからである。ともかくも今回は警保局や警視庁や特高警察部等へ亘りをつけた上、教育界へ宣明したのであれば、もはや関係者には安心されて然るべしと思ふ。これ以上に運動がましきやうの意味は毫もないことだけは特に御断りしておく。

二、完全転向の意義如何

完全なる転向とは何を意味するか、先づ以て判明されなければならぬ。先日警視庁の労働課へ帯同して、転向にも無数の程度があるなどを話し合つたが、消極的と積極的、利己的と社会的等、種々の検討が必要であらう。少くとも左の三ヶ条だけは要求されねばなるまい。

一、皇室中心の国体観念と合致し、虚妄なる観念論的日本精神でなくて充実したるそれたる事。

二、あくまで合法的手段の生活をなす事。

これだけでも転向者たるに於て今の内では沢山でないか。しかしながら、これだけならば気の抜けたピールのやうなもので、毒にはならぬが、薬にもならぬといふ非社会的の個人主義で、教育者としては最劣等級のものといはねばなるまい。是に於てか、こんな消極的な転向よりは、も一段飛躍したものでなければならぬ。そこで今一ヶ条を加へなければならぬ。

三、自己一身を衛れば足るといふ消極的の個人主義の生活を脱し、積極的に社会の指導に任ずるといふ愛国心に燃える事。

かの階級闘争の手段として自国を超越して世界のプロレタリアをあてにするといふ、観念論的なマルキシズムは全く捨てると共に、日本精神も内容の空虚なる観念論に満足せず、盲目的感情

論に堕せず、国体の根柢にまで突き詰めた上で、建て直つた教育者とならねばならぬ。而して合理的計画的の教育をなし、他の文化的分業者が悉く科学的指導によつて挙げつゝある程度の高い能率を教育者も挙げ得るやうにならねばならぬ。是に於て初めて前科を償却した完全教師といふことが出来るであらう。

三、何を以てその証明をするか

この事を何によつて証明するか。単なる觀念論的理論だけではなく實際生活によつての証明でなくてはなるまい。而してその上にその基づく理論が説明されるならば、もう疑ふべからざるものとしなければなるまい。この場合に「文証と現証と道理との三つが具備しなければ信ずる勿れ」といふ釈尊の御遺言が役立つのである。

その現証として完全転向せる四君の告白が如何ほどの価値を持つかは、こゝに云ふべき限りではない。が、全国の赤化事件の当事者が等しく憂鬱の生活に沈淪してゐるのを普通とする中に、敢然として警視庁や警保局を訪ひ、仇敵を忘れて朗かに懇談し、積極的に同じ境遇者に呼びかけんとする途上にある以上は、これをだも疑ふのはあまりに怪疑論者でないか。^{(ママ)(替)}それよりは、「何故か」の研究こそ今後の方針として重大でないか。然らば問題は最早その根柢如何といふことに進んだものであらう。いかに立派な言動でも人間同志では欺くことが出来るから、容易に安心は出来ない。そこに宗教的根柢の要求が生ずるのである。

といふて、如何なる宗教でも偽れぬ保証になるかといふと、さうではない。生き仏の如く尊敬を博して居る高僧や牧師でも、随分如何はしいものがある。氏子総代が公然賽銭をごまかしても神罰がないといふ世の中ではそれもあやしい。是に於てか、正善必賞、邪惡必罰といふ文証と道理と現証とが具備した宗教でなければ人格の保証にはなれないことになる。

といふと、そんな宗教が今時あらう筈がないと、又一笑に附するかも知れない。が、これとてその人々が現在に身・口・意の三方から証明したら、最早疑ふのが無理でないか。

四君の言によると私に何か非凡の力でもあつて、完全転向をさせた如くに聞えるかも知れないが、これは全く間違ひである。頭腦明晰なる為にマルキストにもなつたほどの青年が、私の如き無名者の言説に動かされるなどとは思ふのが既に間違つてゐる。たゞ經文通りの実証が、てき面に表はれ、それが一々道理に合ふといふ説明がつくからたまらない。それが為めには如何ともする能はず、信仰に入つて見ると、こゝにマルキシズムや、ありふれた宗教とは全く異つた境地在展開するので、行と解とが二つながら進んで来、するとこんどは今までの独善主義で到底、居られなくなつた結果、今度の如き頼まれもせぬのに、苦しい中から自腹迄きつて同境遇者に呼びかけ、聊か罪亡ぼしと共に、社会奉仕をしようとするのである。こんなことは既成の宗教に囚はれた見解では、恐らく理解され難いことで、五年も十年も宗教生活を重ねてさへも出来ないことを半年や一年で、生意氣だと評価されるであらう。そこでこの四君の場合に於て、単なる枝葉の如き、浅いものなら証拠にはならぬが、宗教の革命、信仰によつて心底の根本が改められたればこ

そ、完全転向が出来たことが肯かれると共に、宗教革命までに達しなければ、此種の救済が出来ないといふことが言へるであらう。吾々はこれ以外に恐らくは如何なる方法もあり得ないといふ仏語を疑ふ能はざるものである。がこれだけの説明では到底納得させることは出来ないであらうが、今は之れ以上には及べないことを遺憾とする。たゞこれ以上のものが他にあるならともかく、さもなくば文証と現証と道理の三具足を条件として、実験されんことを切望するものである。

赤化教員諸君よ、破廉恥罪とは異ふぞ。完全転向が出来たらば、いつ迄も憂鬱であつてはならぬ。維新革命の志士は大概一度は獄舎に修養したものでないか。今日の立憲政治は往年自由党の諸志士が藩閥政府と闘つたお蔭である。たゞ他力を頼み、独を慎しむだけで、無害とはなつたが、有益とならなければ真の甦生とは云へない。悪を去ると共に善に向つて敢然と進んだ以前の勇氣を恢復してこそ、初めて毒が變じて薬となるのである。そのためには自行と化他との両生活を並行せねばならぬことを記せられよ。

四、その基礎たる宗教とは何か

然らば完全転向の根拠たる宗教とは一たい何か。之に答へるのは造作ないが、幾人にも試して見ると、十中の九分九厘までその名前を率直にいふと、聞いただけで、既成宗教の基礎觀念から「又例のか」と、怨嫉輕蔑の感情を起し、認識もしない前に評価して、真面目に聞かうとはせぬものである。それが經文に明記される文証の通りであるのに驚かされるので、少しく予備的な断りを必要とする。

他の事なら何でもないことが、宗教問題に限つてさうであり、一たん怨嫉の感情が遮つたが最後、もう常識を失つて仕舞つて、狂態にまで至るものがあり、それを如何なる智者でも学者でも宗教家でも、小さき個我を捨てきれぬかぎり、必ず免れ得ないこと、恰も罪人が警官の前に立つたやうになるから、斯くは念を押すのである。

一たいこれは何故かと次の疑ひが起るであらうが、經文に何等カラクリがあらう訳はない。正善と慈悲以外に何物もないから、正直であり個人主義でないならば、嫌ふ筈がないのに、さやうの現証が起るのは要するに心底の歪曲がそれによつて暴露されると解釈するより外に途がないのである。それが乃ちこの宗教が人間の善惡判定の明鑑であり、従つて勸善懲惡の保証であるとされる所以である。

五、宗教革命は可能なるか

さてその宗教革命の問題に入るに當つて、如何なる宗教を選定すべきか。これは前記の完全転向の三条件を直ちに之に適用してよいと思ふが、要するに科学に背反せずして、しかも現当二世の生活原理たるべきものたること、「古今ニ通シテ謬ラス、中外ニ施シテ悖ラス」と教育勅語に仰せられた神ながらの大道に合致して、所謂日本精神の根柢たるべきものでなければならぬ。

果して然らばそれこそ学校教育に取り入れて差支なく、又この根柢がなくては真の教育は出来ない。今の教育の欠陥がこゝだと断言してよいと思ふのである。純真なる科学的検討を切望してやまない次第である。

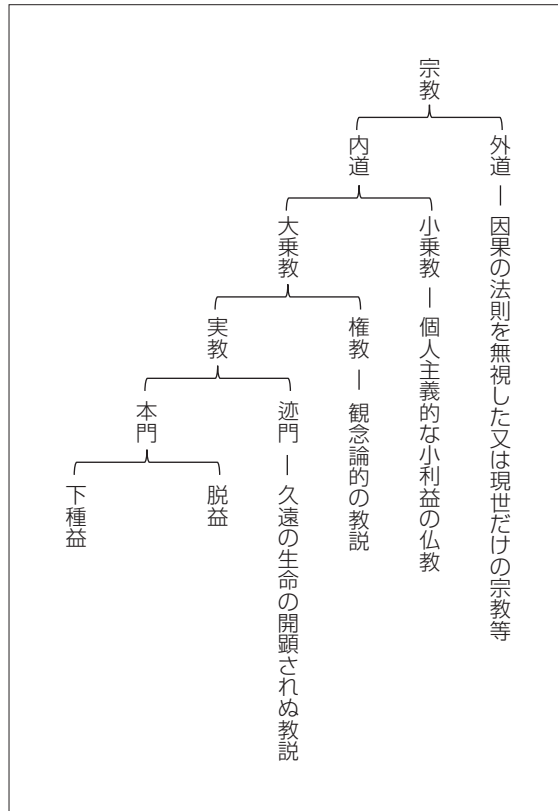
さて如何したらその比較検討が出来、而してその中から最高の宗教が選定されるかの問題に入らねばならぬが、これは仲々の大問題であつて、茲に言ふ余裕はないから、たゞ「日出でぬれば星かくる。巧を見て拙を知る」といふ伝教大師の金言に基づく、評価法の原則によつて、オリンピックの競走や、撃剣柔道の試合や、美術の展覧会などのやうな、宗教それ自身の比較討論や、現証の比較などをなすことが出来るならば決して不可能ではなく、且つ案外造作ないことだけを言ふておく。

廻りくどくも、だめを押すのは評価と認識をも混淆せず、宗教の本質を認識した上で、公正に評価されんことを切望するからである。

さて愈々是等の人々の完全転向を可能ならしめた宗教は何かといふと、それはもう御察しでもあらう所の法華経である。

といふと、天台宗や日蓮宗の各派を十把一束に批評されるのが普通であるが、これに対して茲に結論だけをいふと、その中に於ける唯だ一つしかない日蓮正宗といふ富士山麓の大石寺派をいふのである。何故に他のすべてに比較して之のみをいふかと、次の疑惑が起ると思ふが、それは明確なる歴史上の根柢があり、文証と現証と道理の三つが具足されてゐるからの事で、冷静にそれが解るならば、歪曲してゐない限りは何人でも理解し得べき事であり、理解した以上は必ず信ぜざるを得ないと思ふのである。要するに日蓮宗といへば「南無妙法蓮華経」の題目を唱へればよいと思ふであらうが、それだけでは何にもならぬもので、日蓮聖人が日興上人に血脈を相承された法華本門の本尊と、本門の戒壇と本門の題目との三大秘法に従ひ、正統なる本尊に対し奉つて、唱題するにあらざれば、真の大利益はなく、それによる事によつてこそ、初めて賞罰が明に証明されるのである。

世界無数の宗教を比較検討することなどは、痴人の夢だと嘲るかも知れぬが、それにはちやんと私は判定の標準を示してござる。理論とその価値（功德又は利益）との両方から右の如くすれば造作ない。「快刀を以て乱麻を断つ」が如きものである。たゞ弱いものが負けるのを恐れて、正々堂々と議論することをせず、蔭でこそゝ悪口をいふ。評価と認識とを混淆するから、いつまでたつても正邪の見別けがつかぬ。そこで今日の如き思想混乱がつゞくのである。左の五重相対がその標準尺度である。



これによつて判定するならば、吾々にでも解るのではあるが、こゝにそれをすれば大論文とならねばならぬので、一例をいふに止める。権実相對の如きは觀念論的と実証論との哲学などに比すべきものであり、小乗教とは個人的の生活法であり、大乘教とは社会的な生活法のことである等。

もしも釈迦と孔子と基督が同一の場所で会談することがあると仮定せよ。吾々凡夫の間に見るが如き、浅ましき感情衝突があるであらうか。地位名誉等の小なる個我を超越したが故に、万人の尊敬を受ける程の聖賢である以上、お互に解らない間は真理闡明のためには、己を空うして忌憚なき論議をこそすれ、釈然として師弟の關係にまで至らねば止まないものでないか。然るに「親心子知らず」の各門下がその浅はかなる見識を以てはてしなく醜き論争をつゞけ、遂に感情の衝突を以て終始するが如きは、その事自体が、既に唾棄すべき陋劣を暴露するものであらう。然るにその善悪優劣を見別けもせず、法衣を着てさへ居れば、何でも構はず妄信するといふに至つては言語同断の極ではないか。

人がある。前後矛盾の實行を敢てする、狂人でなくて何であらう。果して然らば釈尊一仏の説教が時によつて水火の矛盾があるとせば狂人の言として信ずるに足らぬものでないか。一そのこと全く信ぜぬならばまだしも、然るに仏として無上最高の崇拜を捧げながら、其中に於ける念仏と真言、禪と法華等と氷炭相容れざる論争を對岸の火事視し、しかもその何れかを妄信し、若しくは何れをも信ぜずといふに至つては何と評すべきか。理性を備へた甲斐がどこにあらう。所詮

宗教革命によつて心の根柢から建て直さなければ、一切人事の混乱は永久に治すべからずと云ふ所以である。

さて法の価値の比較に至つても要するに「日出でぬれば星かくる巧を見て拙を知る。」といふ伝教大師の金言を日蓮聖人が実証によりて裏書されたのを原則とすれば造作ない。これが即ち創価教育学の価値原則とする所である。

美術、芸術などの鑑賞はそれである。上級のものが現はれない間は最上の美として輝いて居られるが、一度上級のものが出現してそれに対するや忽ち醜と変化する。撃剣柔道なども然り、この場合弱者は強者に対し必ず嫉妬心を以て比較されるを嫌ふものである。現今沢山の宗教が蘭菊と無階級に並立し、人間の帰趨を惑はしめる所以がそれによる。

目前に小利益を与へて遠大の損害を与へる宗教は、遠大の利益を与へるためには、目前に小損害を与へて警醒せしめんとする親心の表現された宗教に対すれば悪魔である。

知らぬ間こそ今までのものが一番よいと思はるれ、一旦解つた以上は最早信ずる能はざるに至ること、恰も流線型の自動車に一度乗つて見ると旧式のそれには乗れない心持がすると同じである。

斯くの如くに比較し検討して来ると、勢ひ妙法といふ最高最大の正法に到達せざるを得ぬ。然らば最早以下の小法による生活即ち小さな利害に打算的な生活などに執着して居られないやうになるのである。これが即ち完全転向となつた根柢である。

六、国体と一致したる宗教とは如何

そんな最高の宗教がこの世に存在するなら「なぜ今までに顕はれないのか」とは、次に誰にも起される疑問であるのが判で捺したやうである。この間に答へることは、同時に「国体と一致した宗教は如何」の問にも答へる事である。

日蓮聖人が最も力強く世に警告する例に挙げられたのは承久の乱である。三上皇とも鳥流しにされ給ふたあの御最後は何事ぞ。権の大夫は臣でないか。猫と鼠、鷹と雀の闘でないか。鼠が猫に勝ち、鷹が雀に敗けるといふ法があるか。と左の如く言はれてゐる。

「天子いくさにまけさせ給ひて隠岐ノ国へつかはされさせ給ふ。日本国の王となる人は天照太神の御魂の入りかはらせ給ふ王也。先生の十善戒の力といひ、いかでか国中の万民の中にはかたぶくべき。設とが（失）ありとも、つみ（罪）ある親を失なき子のあだむにてこそ候ぬらめ、設親に重罪ありとも、子の身として失に行はんに天うけ給ふべしや云々。」（高橋入道御返事）
斯様な強い折伏を時の政府に対つて忌憚なくされるから、あの迫害の来たのは当然である。されば日本国体に違背したる幕府に容れられないのは徳川時代でも同様であらう。是に於てか當時の政權に阿附迎合して、その勢力を得てゐた諸宗並に日蓮各派の中にありて、あくまで宗祖の正意を頑強に伝へて屈するところないのが、日蓮正宗唯一つあるのみとせば、明治の世になつて初めて顕はれることに怪しむ所はあるまい。蓋し覇道をしりぞけ、皇道を顕揚し、天壤無窮の神勅に合致するが故である。

聖徳太子や桓武天皇は申すに及ばず、和気清麿でも、菅原道実でも、楠正成でも国史中の最大忠臣は皆法華經の信者であり、徳川光圀、加藤清正、大石良雄、大塩平八郎、相馬大作、佐久間象山、勝海舟等諸英雄なども悉く法華經の信者であつたことを思ひ合せると歴史家の宗教に対する無識、歪曲から殊更に之に触れることを避けた為に教育社会には一向注意をされないで来たのであるが、法華經が日本国体といかに親密の関係があるかゝ察せられやう。「古今ニ通シテ謬ラス中外ニ施シテ悖ラス」と仰せられた「神ナカラノ大道」と契合するからである。と断定するに異議はあるまい。

赤化事件の闘士が精神の根柢として宗教革命にまで及んだ結果、初めて完全なる転向が出来、前途に輝かしい光明が認められ、茲に止むに止まれぬ積極的精神に立ち帰つた理由がわかると共に、これこそすべての赤化青年の唯一の完全転向の途であり、こゝまで至らなければ眞の積極転向は言ふべくして能はざる所として過言ではあるまい。

七、創価教育学との関係如何

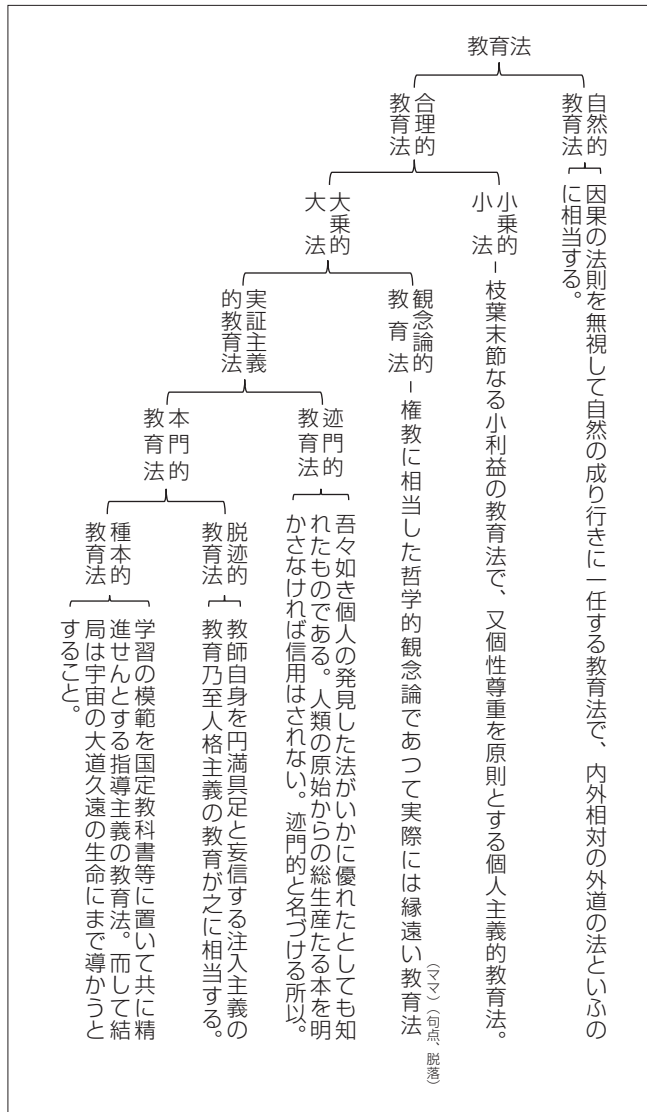
創価教育学との関係如何といふことが最後に残る。従来の哲学的教育学は、人間の心を見詰めて、それから方法を案出しようとする傾向であるから、理論は如何に高遠でも、実際の教育に役立つことが少い。今日の教育の行詰りを来した所以であり、又我国教育界の不祥事の原因とも見られる所である。茲に於て他のすべての分業が科学的根柢によつて、最高の能率を挙げるまでに至つて居るのに鑑みて、教育法も、もつと、ゝゝ、効果的の方法によらねばならぬといふのが社会の要求である。それが為には科学的的教育法を見出さねばならぬ。医学の發達の順序に倣へば一番手近に出来る筈である。

医学は哲学者の手によつて出来たものではなく、薬や治療法など人類の發生以来の経験の蓄積によつて出来たのである。教育も然り学者の指導を俟つ迄もなく、人類の原始時代から教育があると共に、治療法と同様に教育法もそれゝゝ、發明されて居るのである。現に恩給年限にも達するほどの教育家は悉く一かどの教育技術を持つて居る。それは自己一代の発見ではなくて、人類経験の総成果を継承するが為である。故にこの経験の結果を自然科学的研究法によつて帰納するならば、法、医、農、工、商等の分科科学と同様に、教育学も独立対等の分科に成立ち、實際教育家の指導原理が得られ、そこで教育の最良の大法が見出されるに相違ないといふのが創価教育学の期する所である。

此の科学の目的は教育法の最良の大法を見出さうとするものであつて、方法の研究が主ではあるが、それだけでは「仏が出来て魂の入らぬ」ものである。いかに形式の研究がされたとして、国家生活の改造の基礎には教育内容の研究対象たる国体觀念までにどうしても徹底しなければならぬ。是に於てか教育の改造には、その根本中核となるべき宗教の革命にまで及ばない限り、竜を画いて点睛を欠くに同じといふのである。

加之、教育法の価値判定にも前記宗教判定の標準たる五重相対がびつたり当てはまる。従つて

他のすべての生活法のそれにも適用され得るのである。



教育方法の最高最大のものを求むるにしても、又その内容の究局目的を認識して指導原理とするにしても、最高最大の宗教によらなければならぬといふのが創価教育学の不動の信念である。

余はもとより斯かる小論文によつて、かゝる広汎なる大問題を解決して皆様の賛同を得んとすることは覚束ないことを知つて居る。たゞ論より証拠、今の世に如何に説明しても、とても疑惑は解けないとまでに思ひ込まれてゐる赤化青年の完全転向が出来るといふ実証を、現前に提出しての論証で之がある以上、よもや一顧の価値なしとはされまいと信ずる。

要するに宗教革命によつて心の根柢から建て直したればこそ、本人等の斯様な率直明確なる自信ある告白も出来、又見聞者のそれに対する信用も出来るといふもので、とても人力の能はざる

所と云はなければならぬ。そこで、斯やうな明確なる文証と現証と道理との具足によつて、斯かる赤化青年の完全なる転向は、宗教革命を前提とせる教育改造によつてのみ可能であつて、今までの処、それ以外には不可能と断じて差支ないと信ずるのである。が果してそれが過言でないか否かは、憂ふべき現下の我国家の為に、真率なる検討を請はんとする所である。而してなほ適確なる反証の挙がるものがないならば、全国数万を数ふる赤化青年の為、切に指導階級に対して真面目なる考慮を煩はさうするのである。^{(ママ)(と、脱落カ)}

這問す、和氣清麿の誠忠を教授するに当り、学校では「宇佐八幡宮の神託を如何に取扱つて居るか」。宗教に無知識の歴史家たちが「触らぬ神に祟りなし」とする指導に遵ひ、お伽噺の如くにしては居ないか。果して然らば、伝説の上に史実を結び付けんとするもので、恐るべき心的影響を生徒に与へはせぬか。そんな事で国体の明徴が可能か。法華經の信仰を離れて、その説明が出来るであらふか。斯かる現実問題に直面しながら實際家諸君は「之をどうするか」と、文部省に詰め寄るだけの熱意が職責上なくてもよいかと。

〈奥付〉

主張

生活改造の根底なる教育・宗教の革命これが達成手段として「智識を世界に求め」「万機公論に決すべし」の御誓文に遵ひ奉る自由論壇

政治経済等、世間的生活の改良は枝葉の剪截である。教育、宗教の改革は根茎の培養である。根茎の培養を怠つて枝葉^{(ママ)(葉)}の剪截に没頭しては、労多くして功なく、国家の滅亡を招くのみ。門前枝葉の剪截に相当する現世の塵掃除は警官等に委して可なり。吾等青年教育者は国家将来への為に根茎の栽培に努めなければならぬ。宗教家までを覚醒せしめ督励して、吾等が教育・宗教の革命を標榜し、蹶起して社会に訴へんとする所以である。

創 価 教 創 学 会^{(ママ)(育)}
 東京市品川区上大崎町三ノ三三六
 電話高輪(44)四五八一・九四九